

昭和
和和
四十四
十六年
六七月
月十二
日
第三種
郵便物
認可
(毎月一回・十五日発行)

(通第二六五号)

慈光

第二十三卷 第六号

次

目

慈愛と真実	(五)	近角常観	(1)
その時聖人ふと姿を消される	……	神原徳草	(5)
ある死刑囚の手記	……	佐々木義軌	(7)
往相と還相	……	北条恵実	(14)
念仏詩抄	……	木村無相	(17)
歎異抄ところぐ(一)	……	花田正夫	(20)
ともしび	……	聚墨生	(23)

見れば、冷やかなる科学・哲学が何等の効をも持ち来たさぬであらう。

阿闍世王の内心の煩悶は、まことに私が実験したるそのままである。私は哲学や修養を以て安心したかのようにならえていたのは、平日無事なるときの粉飾（ふんしよく）に過ぎず、かくのごとき場合はただ自分の煩悶を鎮解して飽くまで同情慈悲の心を以てその苦痛を融かしてくる人が願わしきばかりであった。この時阿闍世王に向かつて来たりたるもの、大医ギバであった。その初の問は大王安眠することを得んやというのである。王答えて曰く、我今正法の王に惡を犯して業病重く、魚を陸におくが如く、堪ゆべからず、我地獄に墮せんこと疑なし、如何ぞ安隱に眠ることを得べけんや。無上の大医の法藥を演説して我が病苦を除きてんやと。ギバ答えて曰く、善いかな王罪を作ると雖も、心に重悔を生じて慚愧を懷けり。大王諸仏世尊常にこの言を説きたもう。二の白法あり、能く衆生を救う。一は慚、二は愧なり。慚は自ら罪を作らず、愧は他を教えて作（な）さしめず。慚は内に自ら羞恥し、愧は發露して人に向かう。慚は人に羞（は）ず、愧は天に羞す。これを慚愧と名づく。無慚愧は名づけて人と為（な）さず、名づけて畜生と為す。慚愧あるが故に能く父母師長を恭敬す、慚愧あるがゆえに父母兄弟姉妹あることを説く。善いかな大王具（つぶさ）に慚愧ありと。かくのごとく、王の慚愧に対

我阿闍世のために、涅槃に入らず。

と。これよりさきに多くの仏弟子が如来に此世に止まりたまえと願えども、これに答えたまわず。彼れ逆惡なる阿闍世王の苦しめるを見て、阿闍世王のために涅槃に入らずして、その来たるを待ちたまう。そこでカシヨウは仏に白（もう）して言わく、如来は一切衆生のために涅槃に入らたまわざるべし、何ゆえに独り阿闍世王のためにしたもうやと。仏のたまわく、この大衆の中一人として永劫別るると思うものはない、独り阿闍世王ばかりは永劫の別れと思いたるため、悶絶して地に投じたのである。それゆえ特に阿闍世王のために涅槃に入らずというたのである。

かくて仏は阿闍世王のために月愛三昧（がつあいさんまい）に入りたまいて、大光明を放ちたまうた。その光清涼にして王の身を照らすに、身の瘡忽ちに癒えて薔蒸（うつじよう）除滅して、身体清涼となったとある。月愛三昧というは月光の優鉢羅華（うぱらけ）を開敷（かいふ）鮮明ならしむる如く、衆生の善心をして開敷ならしむるものである。又月光の一切行路の人をして、心に歡喜を生ぜしむる如く、涅槃の道を修習する人に歡喜を生ぜしむるものである。ギバ曰く、仏は先ず王の身の病を救うて、しかる後心にならば、現に私は煩悶せし時、身体病癒ゆるの後入信歡喜した。この阿闍世王は他人のことではない、私自身の

して大なる同情を以て迎え、そぞろに説きて曰く、大王当に知るべし、カピラ城ジョウボン王の子、姓は瞿曇（くどん）氏、字は悉達多（しつたると）、師なくして独悟せり。自然にして、無上道を得たまひ、大慈大悲にして、一切衆生を憐愍すること我が子の如し。大王一たび娑羅雙樹間（さらそうじゆかん）に往き、如来の所に到り、誠心に法を聴けと。

その時虚空に声ありて曰く、大法の明燈まさに滅せんとし、大法船沈まんと欲し、仏日まさに大涅槃山に没せんとす。仏もし世を去りたまわば王の重罪更に治する者なし。今既に阿鼻地獄の重罪を作れり、王必ず免るること能わず。ただ願わくは大王速かに仏の所へ往きたまえ、仏世尊を除きては余は能（よ）く救うものなし、我汝を慇懃（しんしん）にゆえに相勸め導くなり。その時大王この語を聞きて心に怖懼（ふく）を懷き、身を挙げて戰慄し、五体掉動（ちようどう）して芭蕉樹の如く、仰いで答えて曰く、汝は是れ誰ぞや、色像を現ぜずしてただ声のみあるはと。曰く、吾は是れ汝の父ビンバジャラなり。汝今ギバの所説に隨うべし、邪見大臣の言に隨うことなかれと。王聞きおわりて悶絶して地にたおれた。身の瘡増劇し冷藥を以てこれに塗るも熱蒸して少しも減することなかった。

その時仏は雙樹の間に在（い）まして、阿闍世王の悶絶して地にたおるるを見たまいて、大衆に告げたまわく、

生き写しである。かくて阿闍世王はギバに伴われて如来のところに詣でた。これより如来があらんかぎりの軟語（なんご）を以て、阿闍世王の罪を慰めたもうた。曰く、汝の父ビンバジャラ王は諸仏を供養したために、王位におることを得た。王位におるがために汝之を害した。我もし供養を受けざりしならば、汝の父も王たるまじ。もし王たらざれば、汝も父を害することはなかったであらう。汝もし罪を得ば、我等諸仏も罪を得ねばならぬ。我等諸仏罪を得ずんば、汝独り罪を得る害はないと。これ如来が衆生助からずんば、我正覺を取らじと誓いたまひし親心である。

かくのごとき如来の親心をきくがために、如何なる阿闍世王も、伊蘭子（いらんし）の臭きが如き心より、梅檀樹（せんだんじゆ）の如き香（かぐわ）しき信を生じた。これを無根（むこん）の信と名づけた。何となればはじめより如来を恭敬せず、法僧を信ぜず、少しも善根を植えたることなし。しかるに不思議なるかな仏にまみえたるため、一切衆生の煩惱惡心が破壊せられた。そこで阿闍世王曰く、我もし衆生の惡心を破壊せば、我常に阿鼻地獄にありて、無量劫の中諸々の衆生のために苦惱を受くるとも以て苦しみとなさずと。実に「念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさうろう」という罪惡觀に徹底されたのである。これ実に阿闍世王の慚愧懺悔であって、現代の反逆闘争思想の難病を飽くまで憐愍矜哀（こうあい）して治療したもう、涅槃醍醐の妙藥であらねばならぬ。

そのとき聖人はふと姿を消される

榎 原 徳 草

仏法を聞くには、聞く者にとってどうしても「好き人」がなければならぬ。「好き人」を通じてでなければ「聞く」ということにはならない。

お経のなかにも、説者と対者があるが、例えば阿彌陀經ならば説者は釈尊、対者つまり聞く者は舍利弗である。阿彌陀經においては仏陀世尊は対告者の舍利弗の名を三十六ぺんも呼んでおられ「舍利弗よ」「舍利弗よ」と呼びかけて説いておられる。

三十六たび舍利弗よ舍利弗よと

和顔愛語す釈迦牟尼仏は

これは歌にもなんにもなっていない私の感懐の表現だが、釈尊が舍利弗に向かって

「ねえ舍利弗よ」

「そして、ねえ舍利弗」

と三十六ぺんも呼びかけてかたりかけておられる仏陀世尊の、悲と智との円満な御姿とその御心を感じたときの腰折れみたいなものである。

師と弟子、といつてしまえば冷たい客観的叙述の世界である。然し、いまのように仏と舍利弗とが説者と聴者になり、好き人とその仰せを蒙る者にと具体化してくると、例えば「雪を見る者は白し」と言い、雪に触れる者は冷たしと言う」との禪語の警句がはつきりとわかるような気がするのである。

聖人が師匠法然上人の仰せを関東の同行たちを前にして「親鸞においては、ただ念仏して弥陀に助けられ参らすべしと、好き人の仰せを蒙りて信する外に、別の仔細なきなり」とかつての日の光景を心に思い浮かべ、その時の感懐にひたつてかたり出される聖人には、好き人法然上人と御自身との万劫にも遭（あ）い難きこの一瞬、その御姿、その面授口訣（めんじゆくけつ）の念仏の光の滝を浴びられた場面がまざまざと現れていたことと思われる。

好き人に遭うてこそ、真実（まこと）が我が身のものになるのであって「愚身の信心におきてはかくの如し」と、我が身に実践した体認の世界を露（ろ）堂々と吐露（とろ）される重量感、巍々（ぎぎ）たる光顔、すべてを包摂する大悲の温容は、ここを源として顕（あらわ）れてくる自然の御姿を拝する。

然し「弥陀の本願まことにおわしまさば釈尊の説教虚言なるべからず。仏説まことにおわしまさば善導の御釈虚言したもうべからず云々」と説かれる聖人の御姿には、好き

そうして御経の最後に、阿彌陀經では、
「仏の所説を聞いて、歡喜し、信受し、作礼（さ）ら
い）して去りぬ」

となつており、舍利弗が面（おもて）に歡喜の色をあらわし、裏（うら）に仏陀世尊の教を信じ、我がものにして、有難い法の徳に心身をうるおして御礼をして去りゆく姿がある。

わたしはこのごろ、この御経の末尾に必ず出て来る言葉に急に心を牽（ひ）かれるようになったのであるが、例えば阿含（あこん）の諸經では大抵「仏の所説を聞いて、歡喜し奉行（ぶぎよう）しぬ」とあり、大無量壽經では「仏の所説を聞いて、歡喜せざるは魔（ま）なり」となっている。

皆、いつてみれば、先生のお話を聞いて身一杯に血のどよめきを感じ、ああ本当に有難い、と心は大智大悲に浴してすつきりして運ぶ歩みも軽ろやかに、それこそ踊躍歡喜して還つてゆく姿が見えるようである。



人に聞いた弥陀仏の本願のまことが、つまり、好き人を通してきこえてきた真実（まこと）が、ただ念仏というこれ一つから、これを本願として説き示されていると拝することができる。

好き人とは、念仏の真実を伝える御方であり、逆にいえば念仏の真実の、権化（ごんけ）の仁が好き人である。歎異抄は私の畢生（ひつせい）の書であるが、歎異抄が私にとつてなくちやならない書となったのは、それに生命を吹き込んで下さった、「ただ念仏して」「たのもしさ」に光の如く生きておられた池山先生があったからであり、先生の御慈育をいただいたからである。蓮華谷の先生の御宅へ何べん通ったことか、胸に雲が湧くと参上する。すっかりとして帰る。また暗くなる。私には先生があるんだ、さあ行こう、そして朗らかな胸、軽い足取りで帰る。こうして何十べん繰返した。ひとえに好き人に邂逅（かいこう）した者の悦びであり、私の生きることそのものは好き人があることだった。然るに十年の後に先生は御往生になった。

淋しきといったらなかった。もう行く所がないのだからそんなとき、先生からいつか聴いた「その時聖人はふと姿を消される」という言葉を想い出した。念仏一つ、と聴いていても「好き人」にいつのまにかより掛っている我らのための慈訓であり悲戒である。淋しい中から細々と念仏していた私に、「ただ念仏のみぞ残れり」と白骨の御文章

もどきの語呂で仰言って下さった先生の御言葉が甦ってき
た。また「念仏は自動作用する」との御言葉も聞こえてき

たのである。そうして「ただ念仏して」が直接我が身の上
に南無阿弥陀仏のたのもしさとなってくるのであった。

ある死刑囚の手記

名拘教誨師 佐々木 義 軌

死刑囚

本籍 朝鮮。昭和八年岐阜県に生る。

入所、昭和三十五年。判決確定、三十七年。

真宗入門。三十八年。帰敬式、四十年。

法名、釈聖煥。学歴、小学校四年中退。

犯罪概要。殺人強盗。

K炭鉱主が炭鉱を売却したいということを聞き、Yを買主と装わせ、二十九年九月にK炭鉱主を料理屋に誘い出し殺害
して金品を強奪。

入所当時キリスト教を希望し、聖書を読み、悔改めを願
ったが、常に失敗を重ね煩悶の末、昭和三十七年頃から指
導課長に願ひ出て浄土真宗に入門した。その年末の端書。

……一九六二年もあと一週間で新年を迎えようとしてお
ります。御多忙の中を昨日は遠路お越し頂き、御本やお
金の差入れまで賜り、何と御礼の言葉もありません。先
生の御厚意を心から有難く嬉しくお受け致しました。本

当に涙の出る程嬉しいものでした。……
(註) 朝鮮国籍故、西暦年号を用いて民族意識を現わし
ております。
こうして半年余りすぎまして段々お互の気心もわかり、
信頼するようになってから、真宗の教を説きはじめ、次の
ように述べた。

宗教の第一は自己を知ることだ。君はキリスト教の悔改

めの出来ないことを知った。これは親鸞聖人が「いずれ
の行もおよび難き身なれば地獄は一定」とも「現に罪惡
生死の凡夫、出離の縁あることなし」といわれたところ
で、君の今の心境である。この者のために阿彌陀仏は本
願を起こして下さったのである。聖人はこの本願を「煩
悩具足の我等はいずれの行にても生死をはなれることあ
るべからざるを憐みたまいて願をおこしたもう本意、惡
人成仏のため」と御自身にうけられていた。……

このようにして段々と話し合ううちに、不思議にも宿善が
いたり、念仏して彌陀にたすけられる本願に安住する身と
なり、本人の願出によって昭和四十年七月に真正院御連校
の御参向を得て、帰敬式を受け、釈聖煥と法名を頂いた。
其後の心境を四十一年二月の便りに、

……本日は私達のために珍味なお土産まで頂きありがと
うございます。

何時ものことながら生きる喜びの追求に日々を送る私に
は御老師のお話で、奥に秘められた真実を悟れるように
なりました。聞く心正しからざれば真理も真理にあらざ
る如く聞える時期もありました。お育てを感謝いたしま
す……。

更に五月九日の便りに、

本日は早朝のお来所誠に感謝申し上げます。最近早く起
床して勤行させて頂いておりますが、以前はお勤めの時

職員方の足音がすると何だか気恥しくなって中止したも
のですが現在それはなくなりました。先生のお言葉通り無心
にお勤めが出来ようになりました。お勤めのあとは心
も爽やかに充実した気分です。ござっております。これもひ
とえに御仏が先生を通じてのお導きということがやっと
わかってきました。
私如き愚が者に生き甲斐を見出させて下さるためには、
先生の多年にわたる地道な御苦勞のたまものです。私共
がもっと／＼真剣になって先生のお話を聞いて居たらも
う少し早く仏教の道に入っていたことでしょう。馬鹿な
私はみ仏の私共のために御苦勞下さったその真意がのみ
こめませんでした。昨今ようやく理解出来るようにな
りました。

また今日は「足ることを知る」人生にいかにか大切にあり
非常な価値をもっているかということ改めて考える機
会にめぐまれ、ありがとうございました。……。

このように念仏の道を一筋にたどり、四十一年三月には処
刑後の死体の引受け等万端を私に依頼しました。又、信の
上の報恩のしるしに点訳の難事を身を粉にしてもの思いで
成し遂げました。

丁度十年前、大川所長の時、母親代りの婦人教誨師とし
て本多まつ江先生にお願いしました。本多先生は学徳あり
聡明な上に謙虚な方でありました。先生は私に

「貴殿は聖人の他力本願のむねをお説き下さって、四人に安心の道を開いて下さって父と成って下さい。私は身の廻りの世話や、家庭の連絡をして母親代りになりましょう」

と申され、それから細大もらず相談して教誨に尽しました。二三年すぎて、四人の中に面接に訪れる肉親もなく、日常の身の廻り品や小遣錢に事欠く様な人々に点訳奉仕をお勤めになり、一冊完成したら何程かの謝金をあげるからと云って本多先生は御自身のポケットマネーをお出しになつてはげまされた。

そこでN君（キリスト教徒）M君（天理教徒）B君（真宗教徒）等が飛びついて始めましたが、単語を区切る文法が難解な上に忍耐力（厚紙に穴をあけるのに手に力がいり指に豆が出来たり肩がこる）がいり、練習に半年位はかかるので皆落伍しましたが、B君だけは本多先生や原田先生の御励ましをうけ、恩に報じる唯一一つの仕事と心を定め、如來の護念をうけて成し遂げました。

点訳本には、西元宗助著歎異抄の世界、妙好人、大和の清九郎全二冊、国語訳浄土三部経、吉川英治著親鸞十二冊、親鸞名言集、現代法話集、金子大栄著現代人の信仰問答、米沢英雄著一人いて、もう一人のあなたへ、等があり、名古屋東本願寺別院青少年会館の図書室に寄贈し、盲人用点字文庫を設立し、B君の法名聖煥を文庫名としました。

って何度投げ出そうとしたか知れない。その都度「不可能な環境にあればこそその奉仕の精神が尊いのだ」と再三のお励ましと指針を興えられたことを覚えてゐる。東別院や市川先生、そして当所の諸先生方の激励、その他多くの御好意のあったことも忘れられない。そのうち御体をもって奉仕精神をお示し下さったのは鶴舞図書館で点字係をせられてゐる原田先生であつた。その崇高な社会奉仕の精神、確固たる信念と御指導には限りない敬意の念で一杯である。それと共に自分の心情の下劣さによる自己嫌悪と不信も味わわずには居られなかつた。

こうした私であつたから、全く暗夜の山中に迷ひ彷徨する孤独な旅人の様に自分の足許すらさだめかねた。そのために、盲人のためとか社会奉仕といった立派なことを口にし乍ら、日常の行為は口と相反するものであつた事を告白しなければならぬ。

こんな私が点字を続けさせて頂いたことは全くお蔭様であり、多年にわたる両師のお教化により、知らぬ間にしみこんだ他力本願の御はたらきと信ずる。御仏の照らし給う莊嚴な白道にはどんな障りをもさわりでなくして下さる。私はこのお蔭で不動の奉仕の精神をもつことが出来る。ここにはじめて盲人方の不幸な宿業を宿世の自己のものと観ることが出来るようになった。ここから生れた私のささやかな行為がホンの微々ではあつても不自由

た。

四十三年四月一日に「点字奉仕について」の題で次のような感想を書きました。

私は奉仕と云う言葉について考えさせられる。これは英語でサービスと云うらしいが、日本で一般に外来語として使われているが、どうも東洋的な奉仕という言葉と多少ニュアンスの相違を感じる。

サービスと云う日本の外来語は、多分に計算されつくした相対的利害得失が内在している。要するに利益を伴う商業上の作戦の道具として使われるきらいがあり、一般的に何気なしに使われているようであるが、実際に西洋人が使う場合のサービスと東洋人の奉仕のそれとどう違うのか、私には解らない。

親鸞聖人の教えをうける仏教徒としての私としては、奉仕とは利他の行為、無我の心からでなくてはならぬと思う。過去の私は無神論者であつた、そのために、信なき迷路を当もなく漂ひ流されてゐる身であつたが、得難い善知識、佐々木、本多の両師にめぐり会い、今日の仏縁を頂き、仏光を身にうけて限りない慈悲を味わつて來た。両師は、父の如く母の如く善導して下さい、いささかの奉仕をさせて頂けるまでにさせられたのである。

思えば点字をはじめから二ヶ年にもなつたが、私の環境からしてよく続けられたと思う。其間種々の問題もあ

な人々の心の糧となれば望外の幸せである。私の奉仕は、自身の心の修業であり、他に何の目的もあり得ない。仏教的私見であるが、奉仕には自己犠牲の覚悟の伴ふものと思う。奉仕ということから何物かを得ようとする心のないものが東洋的奉仕であると思う。この自覚あつて始めて奉仕の意義と喜びが生れるであらうし、感謝される奉仕者となれよう。私自身を奉仕者の一人と数えることを若し許されるならば、それは宿世の不可思議なお導きであり、もはや私の奉仕は私の意思外のことである。従つて私の奉仕は誰のためでもない、つまり私自身のために御仏への報恩感謝をさせて頂くことである。

合掌 釈聖煥 記

私はかねて帰敬式をうけた人々に東本願寺に君方の納骨をしようとの約束通りにK君とT君の納骨をすませて、B君に知らせておいた。その四十四年十月の手紙。

拝呈、雨の中お忙しい中を早朝よりお出で下さりありがとうございます。本多先生御他界の今日、先生の御元氣なお顔を拝しますことは嬉しい限りです。

私は御存じの如く無為徒食の輩の一人でお恥かしいことです。私共は世間の法の上で排撃されており、社会人としても相容れられない身でありますから、今生で明日のために努力する根拠を見出すことは非常に困難と云う外はありません。此の様な場所に長年居りますと心も体も不

具になります、持病の耳が悪くなり昨夜などは十分眠れませんでした。こんな私も、常々聴聞いたします彌陀仏の本願のお慈悲を味わいます時、お蔭様でどうにか耐えることが出来ます。唯念仏させて頂くことが、長く／＼待つ身には、誰よりも私一人のためと感謝しております。

只今、老師様の京都よりのお端書が届きました。K君T君の二人は恵まれて幸福なことです。本多先生が御在世でしたらきっとお伴されたことと、新に涙を禁じ得ません。本当に有難うございました。Y君T君に代って感謝申し上げます。これは彼等のことではなく私自身のこととして御礼申し上げます。彼等は弥陀仏の御許にあつて私共に慈光を注いでくれていることと信じます。

函には函を、目には目をの現代社会においてますます精神の糧として他力の御教を必要とすることでしょう。御老師様も御無理のない御生活をして下さり、長く御活躍して下さいよう念じております。

合掌 釈聖煥

四十五年五月に、前指導課長三栗家師から聖人の御消息の影印版を頂いたので、私がB君に渡しました時の手記。

……聖人様の御消息を頂くにつれ、愚生が思いますことは「唯称念仏」の外はありません。日夜称名する、否やせられるところに、すでに撰取されていることを自覚い

たします。十数年の拘禁生活で得たものはこれだけです。また何も得ようと思つたことはありません。仏書を味読して何か変つたものはないかとキンキラの眼でさぐりましたが、何も得られませんでした。あるものは「唯称念仏」の聖人様の言葉だけでございます。

尤も大切なことは凡愚の身であつてその教の中から何かを見出そうとする不遜な心を除去することです、ただ朝夕御仏前で称名念仏させて頂くところに、すべては聖人様のみ教に生かされていることを知らされます。これもひとえに御老師様のおそだてと感謝しております。

愚生にとっては一日生かされて居るも、百年生かされて居るも同一念仏です。最近はどうも活字がおどるものですから本を読むと頭が痛くなり困つて居ります。多分眼が悪くなつて居るのでしよう、十数年来薄暗い房内で讀書にふけつて居る業のあらわれでしょう。宿業止み難き身、唯如来一仏を念ずる外はありません。

先日差入れて下さった、東昇著「力の限界」はすばらしい名著です、しばらくお借り致します。今の私は、信道、慈光、同朋だけ読ませて頂けば結構です。真宗聖典を少しずつ味わせて頂くと共に御老師様のお話をお聞きするだけで心の安らぎを得ております、よろしくお願い申します。

合掌 釈聖煥

さて、上記の大川所長のお勧めで、婦人教誨師が三人出

来、本多先生の発案で死刑囚の母の会を設立され五月と十月の二回、彼等の好むものを腹一杯御馳走して慰めていられたが、本多先生御逝去、又伊藤先生も病氣のため橋本先生一人になられました。しかし死刑囚全員が真宗教徒ばかりの現状ですから、私から申出て、父母の会と改名し、一

昨年から続けました。昨年十月ボタモチの注文が出、ことに母親の味わいのする手料理をとのことで、拙寺でこちらえ父母の会を催しましたが、これがはからずもB君の送別会となり、その礼状が絶筆となりました。十月二十三日の手紙がそれであります。

……一昨日は御坊守様をはじめ御寺族の皆様のご誠意あふれた御馳走にあずかり、愚生、自己の環境に照らし見る時心中感涙の外ありませんでした。

本日集会で全員顔を合わせたのですが、私はあの御馳走で胃が驚いてトラブルを起しはすまいかと注意しておりましたが、その心配はなく「お心」は無事に血肉となつたことが判りました。おはぎの味が今日まで舌の上に残留している感じで、なんとも云えない微妙な美味に皆々大喜びしておりました。私はまた御馳走をおとして仏意を聴味させていただきました、これひとえに御老師様の御苦勞の賜と感謝しております。

仏説を聴聞する時、常にさせていたたくと云う受身をもつて表現させることは、御老師様の御導きを正しく了解

させて頂く上に大切な要と存じ、そこに仏力他力のひとりばたらきと仰いでおります。

この得難い御馳走を頂き、御礼の言葉も見出せませぬ。何卒御坊守様や御寺族の皆様によりしくお伝言下さいますようお願い申します……。

合掌 釈聖煥

祖師聖人の和讃に、信心の智慧に入りてこそ仏恩報ずる身とはなれ、とも、水多きに水多し障り多きに徳多しとありますように、罪重く障り多き身が彌陀の催しにあずかり念仏申す身になり、仏恩報謝に明けくれる念仏行者として私共のよき手本となつてくれました。

最後に処刑前お別れの法話を誌しましょう。

君ははじめギリスト教によって救われようとして脱落し親鸞聖人の悪人正機の本願に救われ、後輩の死刑囚に自己の体験を話して、聖人の教に誘導して下さつたお蔭で名古屋拘置所だけは全国に類のない真宗教徒が皆帰敬式を受け、同一念仏の中に同朋として仲良くして来たことは、君の蔭の力に負う所が多であつた。私の生涯忘れられぬ恩出である。また新刊書を差し入れても君程熱読翫味してくれた人がないから、張合いがなくなくなり、淋しいが、歎異抄九章に「なごりおしくおもえども娑婆の縁つきてちからなくしておわるとき彼土へはまいるべきな

り、いそぎまいりたきころなきものをことに憐みたまうなり」とある通り、これでお別れしよう。

B君は合掌して「先生有難うございました、一足先に参らせて頂きます。お導き頂いた御礼に、点訳して頂いたお礼金が〇万ありますから御恩報謝の万分の一にもと思ひ先生に託下げいたします」と云いますので、「B君有難う、課長さんと本屋に行き死刑囚にむいた新刊書を求め君の名を誌して君の厚意を永久に残して置く」と話すと「何から何まで細心の御心使いありがとうございます」と念仏で別れ、十月二十四日に往生の素懷を遂げました。

終りに、昭和四十三年死刑確定したC君がB君のあとを継いで四十四年夏より点訳を始め、すでに本年二月までに十四冊を完成してくれました。B君の点字本は五十二冊、聖煥文庫と名づけて東別院の青少年会館に公開し、C君のは明光文庫と名づけて同会館で同様に公開されることになりました。

本年二月に本多先生とB君の追悼会を、栢高寺の若奥様のお願出によって東別院本堂で盛大に催されました。C君にその模様を話しますと「よかったなあ、Bさんもとんなにか喜んで居ることでしょう。先生私もやらせていただきます、生のある限り一生懸命にやらせて頂きます」と感激の手紙をくれました。

何もかも如來の御はからいで点訳報恩行が連続無窮する

往 相 と 還 相

昨年十月の文春の随筆に第一生命取締役の矢野一郎氏の一文がのっている。矢野氏は七十歳ぐらいの実業家で、自分の晩年にあたって立派な「うしろ姿」で人生を終わりたいという希望をのべていられる。これは誰しもひとしく感ずるところであるし、又人生の終りを「うしろ姿」としてとらえられたことは大変たくみな表現だと思う。

人間も六十歳の声をきくとポツポツ自分が歩んできた道が真面目にふりかえらされるし、随って毎日の現実生活の中に自分のうしろ姿が気にかかりだすのではないだろうか。と私自身いろいろ考えさせられるのである。

背中に人の注視を感じると、背を正しく背のびして窮屈に歩き続ける経験を持たない人はないだろう。いくつになっても俗にいうカッコいいうしろ姿で歩もうとする。「老兵は消えてゆく」といったマックアサ元師の述懐の中にも悲劇の英雄のうしろ姿の意識と感懷があったのではないだろうか。かくて偉人も凡人もひとしく老齡境に入ると自分のうしろ姿が気にかかり、よいうしろ姿を後に続く人々

ことを念じつゝ摘筆いたします。

四十六年 三月中旬、記す。

法 語 抄 香 月 院 師

香月院師美濃養老の信者の家にて

「当流には信心を得ねば地獄に落ちる、信心をうるといふは、阿弥陀をたのむことじや。

阿彌陀をたのむというは、助けてやろうとある仰せを決定する一念のことじやほどに、主人この上は、念仏を申して喜ぶのじや、サア御いとま申す」と教えられぬ。

評 世

おもわず迷いのはてはつきにけりさとの岸は今日や明日やと

おれはあそびを別院で
おれはあそびを別院で
おれはあそびを別院で
おれはあそびを別院で
おれはあそびを別院で
おれはあそびを別院で
おれはあそびを別院で
おれはあそびを別院で
おれはあそびを別院で
おれはあそびを別院で

北 条 恵 実

に刻みつけておきたいと願うようになる。

私はここで往相と還相（げんそう）ということを考えるのである。よいうしろ姿を残そうとするのは往く相である、往相である。この世によい自分のイメージをとどめて去ろうとする願いである。正しく真面目な生き方としてその態度は立派であり、尊敬さるべきである。私もそんな立派な生き方をし、見事なうしろ姿の影像をとどめてわが生涯を歩み続けたいと願ひはするが、さて現実の私はと考えると到底そんなことができそうではない、いや絶対にできないということをしみじみと感ずるのである。

私のうしろ姿……まことに情ない自分のうしろ姿がボンヤリと自分に見えてくるのである。落ちつきのない挙動、肩をおとして左顧右べん（さこうべん）、歩調も右によったり左に傾いたり、それこそ足元の定まらぬ乱れ足である。お念仏は有難い、すべてに感謝せねばならぬと口に云いつつも、心からそのように実感しているであろうか。私自身はお恥かしいことながら、食臆煩惱の日々を送り、そ

の中から時々お念仏が出て下さる。自分の口からでて下さるお念仏によって、ああ仏様がより添っていて下さるのだと気づかせていただいて、まことに細々ながらの念仏相続である。

大いなるものの力にひかれゆく、わが足どりのおぼつかなさよ、と九条武子夫人の歌にあるが、まことにつきつめたお味わいであろう。

親鸞聖人はどうであつたであろうか。九十歳まで長生きせられた聖人は、立派な後ろ姿をのこそうとされたであらうか？ 聖人は御自ら「愚禿」と名のり、日傭いで生計をたてながら、人からは「念仏まる」とあだなされながら念仏の日を送った賀古の教信沙弥（きようしんしやみ）を生活の手下とし、又自分の遺骸は賀茂川に流して魚に与えよとまで云われた聖人は人間のうしろ姿が消えて、あとには念仏成仏せられた還相の聖人の徳光が永久に輝いているのである。

○

大正時代に、親鸞聖人は実在しなかった、架空の人物であるという説をたてた学者さえあつたが、この説を指したものであると思うが、亀井勝一郎氏はこの聖人の非実在論ほど素晴らしい聖人の伝説はないといっている。亀井氏は聖人が実在しなかったという説に賛同するのではなくてそんな説をなさしめる程に聖人は自己の足跡を消し、うし

光のもとに音をたてて流れる春の小川のような律調をつたえる、生命の律調である。彌陀の本願を源としてこんこんと流れてつきぬ無量寿の律調である。

かつて私は歐洲を旅行し、西ドイツのフランクフルト市で、文豪ゲーテが住んだ家を観望した。そこには彼の遺品や手紙や原稿などが陳列されていたが、彼の畢生の大作「ファウスト」が彼が五十九歳で筆をおこして、完結したのが二十三年後の八十二歳であつたと知って感歎した。その時、私は親鸞聖人の著述年代を思い合せて天才や偉人のたくましさの相似性を痛感させられた。

思うに人間の力のたくましさは、時にごう慢になつたり野になつたりする。ところが親鸞聖人のたくましさは、如^レ相^レ来の本願に直結する。そこに自力のうしろ姿をとどめず、またその故に謙虚なたくましさの故に聖人は永遠の前向きの姿で、苦悩はてしないわれら凡夫に同坐せられて優しく話しかけて下さるのである。

高いところから号令するのではなく、いつも「親鸞もこの不審ありつるに……」というように、私と同じ立場にあつて歩調をそろえながら、彌陀の慈光をさし示して下さいさるのである。たど／＼しいながら私もいのちのあるかざり、聖人の歩まれたこの道をたどらせて頂きたいと願つております。

る姿を消そうとされたことを讃嘆しているのである、これらは私も全く同感である。

正信偈には釈尊からインド、中国、日本の三国にわたる七高僧の教えを連ね讃仰して、最後の結びは「唯この高僧の説を信すべし」といい、歎異抄には「親鸞は弟子一人ももたず候」とあり、又和讃には「本師源空あらわれて、浄土真宗ひらきつつ」と讃えて、浄土真宗は御師匠の法然聖人のお開きになつたものと讃嘆しておいでになつて、自分が浄土真宗を開いたなどとは一言も仰言つておいでにならず、そこには全く自分のうしろ姿は消えて、ただひたすらに大いなる本願を仰ぎ、本願に攝取され、本願にあることを慶喜讃仰されているのである。ここに人間親鸞のうしろ姿は消えて、本願に生きぬかれた仏格親鸞のお姿が浮きぼりにされてくるのである。聖人のお念仏の教が八百年後の今日、なお力強い迫力をもって、苦悩する人間の胸にせまり、限りなく彌陀大悲の光をそそぐのである。

聖人のお書きなされたものを拝見すると、そのすべてといつてよい御労作は五十歳後のものである。特に高い格調と若々しい情熱を傾けて仏を讃え教を讃え師を讃え、御自身を悲歎述懐なされる和讃はすべて七十代から八十代にかけて述作されたものであるが、その一首々々がなんと激烈といふのちにおどるお言葉であらうか。普通人は七・八十といえは生気とみに衰える年齢であるのに、聖人の和讃は陽

雲

（山村暮鳥）生田八十九

丘の上で

としよりと こどもと

うつとりと雲を

ながめている

おなじく

おうい雲よ ゆうゆうと

馬鹿にのんきそうじやないか

どこまで行くんだ

ずっと磐城平（いわきだいら）の方まで行くんか

ある時

雲もまた自分のようだ

自分のように

すつかり途方にくれているのだ

あまりにあまりにひろすぎる

涯（はて）のない蒼空（あおぞら）なので

おう老子よ

こんなときだ

にこにことして

ひよつこりてきませんか

念 仏 詩 抄 (一)

木 村 無 相

念 仏 の み ぞ

そのときどきの ひらめきを
そのままメモした その中の
詩の形式のものうち
そのいくつかの「詩抄」です

ひとりよがりのものですが

「領解」といつてもよいでしょう

領解といつても ソラゴト タワゴト

念仏のみぞ マコトにて

念仏のみぞ マコトにて――

浄 土 眞 宗

如来ほうぞうさま

ナムアミダブツ

三部経さま

易行の一門

ただ ねんぶつ――

こ の 不 思 議

彌陀の名号となえつつ

み名のマコトを いただけば

業煩惱の このわれに

涅槃のひかり さし入りにて

業煩惱の そのままに

不 断 煩 悩 得 涅 槃

ひかりに生くる 身とはなる

ああ

この不思議 この不思議

思 徳

あれ ねんぶつに 聞こえます

あれねんぶつに おじよう土の

清浄衆が 聞こえます

この無耳人の 耳となり

じよう土のお声 聞かしむる

によらいの恩徳 ナムアミダ

ナムアミダブツ

浄土真宗

ナムアミダブツ

わたしのための

ナムアミダブツ

親 鸞 さ ま に

有縁の知識に よらずんば

親鸞さまに よらずんば

易 行 の 一 門

有縁の知識によらずんば

いかでか 易行の一門に

入ることを得んや

ナムアミダブツ ナムアミダ――

ダ メ

どこが ダメ ここが ダメ

そんなことどころのさわぎでない

みんな ダメ まるきり ダメ

ねこそぎ ダメ

いずれの行も およびがたき 身なれば

とても 地獄は一定 すみかぞかし

大 悲 無 倦

あさまし あさましの わが身なれ

あさまし あさましの わが身なれ

大悲無倦 常照我

た ず ぬ れ ば

苦悩のわれの あるかぎり

ああ

如来あり ねぶつあり

如来の作願を たずぬれば
如来の作願を たずぬれば

道

たった 一つの たった 一つの
道がある

ナムアミダブツの 道がある

汝一心正念にして ただちに來たれ

われよく 汝をまもらん

および声こそ 道である

および声こそ 道である

呼びたもう

夜空（よぞら） ふかきに

星のあり

こころふかきに によらいあり

ナムアミダブツと 呼びたもう

ナムアミダブツと 呼びたもう

おん 同朋

右を見ても おん同朋

左を見ても おん同朋

前を見ても おん同朋

後を見ても おん同朋

みんな みんな おん同朋

一期一会

一期（いちご）一会（いちえ）の

みんな かなしく なつかしく

ナムアミダブツ

如来ほうぞうさま

如来ほうぞうさま

如来ほうぞうさま

如来ほうぞうさま

ナムアミダブツと 礼したてまつる。

昭和四十六年二月一日（第一号）

「詩抄」わが かたみとならん 冬晴るる

歎異抄から与えられたもの

(一)

花田正夫

一、仏語の読み方

先日、東京工大の某名誉教授が東京精薄児収容所で数学を教えた体験から次のようなことを語られた。

「科学の中で数学は一番抽象的なために精薄児に教えることは非常にむづかしい。例えば（ $2+3=5$ ）にしても、2は2であり、3は3であって、加えるとなぜ5になるのかか解らない。そこでタイルを3つと2つ持ってきて、これを一緒にしてカチッと音をさせて見せたらはじめてうなずいた。又零ということがわかりにくい、色々考えた末、箱に小石を入れておき、次々と取り出させて何もなくなつた時、これが零であると説明するとどうにか解かってくれた。

次に（ $2 \times 3 = 6$ ）ということが難解であった。そこで兎を六匹連れてきて、その二つずつの耳を数えさせて十二あるのを確かめさせてようやく納得した。こうした工夫をしながら、生活と直結する数学が如何に大切であるかをかえって精薄児に教えられた。数学の好きな人は多いのに、

段々進むにつれて生活から離れて抽象化（ちゆうしゅうか）されるので、数学は苦手という風になり易い。私はこうしたことから精薄児から上滑りでない、生活と直結した数学の妙味の大切さを知らされた云々」

大体こんなことであつた。これによって、仏教語もとかく上滑りに聞き流し勝ちになり、その概念を覚えて、もう解つたと素通りしていることの多いのを省みさせられた。そこに生活と直結せぬ抽象論、観念論におちて私自身真の妙味もないくせに、我心得顔でいることの無智な骨稽さに愧じ入るばかりであつた。

近角先生は、死んだら浄土といった風に現実の生活から離れている人の多いことを誠められて、絵を描くにはカンパスが要るし、字を書くには紙がある、信仰は実生活の上に建現して来なければならぬと云われた。

又安波医師は、現実の生活にしっかりと足を下ろしてこそ仏法も生き／＼と味わうことが出来る、実生活が浮いてくると信仰問題も駄目になる。かと云って実生活だけをしつ

かりやっていたればそれでよいというものではない、車の両輪のように聞法と生活ははなしてはならないと脚下を省みていられる。そうしたことを基調において歎異抄をあらためて一句々読みかえした。

二、本願と往生と念仏

試みに本抄から本願、誓願、願というような言葉拾りと五十七、往生の語は三十六、念仏は四十一あった。

そこに大きなうなづかされたのは、本抄は弥陀の本願のまことを繰り返しまき返し説かれて、凡愚の私共を導き、往生成仏せしめて下さるために、大悲のかたまりの念仏をお恵み下さる書であるということであった。

第一条に「誓願不思議にたすけられまいらせて」、「罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします」。常の仰せに「さればそくばくの業を持ちける身にてありけるをたすけんと思召し立ちける本願のかたじけなさよ」等々随所に見られる本願にたすけられるとは、念仏にて浄土に往生し、ただちに成仏させて下され。仏の大悲を行じて一切の有縁の人々を導く力を与えられることである。

三、本願を聞く

仏法に八万四千の経巻がある、そこには仏智にひらける広大無辺な仏界、浄土が説かれ、その実修の道も根機に応じて示されている。しかしその淵源、あらゆる河川の水源

々の修行を聞いて覚えたりすることではなしに、

「聞、というは衆生、仏願の生超本末（しようきほんまつ）をきいて疑心あることなし是れを聞というなり」

と、聖人は手を執って教えられる。本願の生起された根本を聞けよ、との仰せである。末のことは本を聞きひらけば自然に判明する、本立てば末おのずから通ずと儒教にもあるが、本末を転倒して空しくおわらないようにとの御親切な言葉と頂いている。

思えば、私自身、親から限らない恵みをうけながら、小遣いが多いとか少いとか、着物がよいとか悪いとかいう風に、親から与えられる物はかりに目がついて、その根源である親心に気付くことが出来なかった。その有様は、

奥山に枝折り枝折るは誰がためぞ

親の身捨てて帰る子のため

の姥捨山の息子同様である。子が迷わぬようにとの悲心の一杯でつくつてくれた枝折りを、親が帰るための道しるべと子は勝手に思い定めてその真実の親心に気付き得ないと同様である。

私は無仏の村といつてよい岡山県の田舎に生まれたので、お念仏は、人の前を通る時御免なさいというように、仏様への挨拶かとも思い、或は人が死ぬると誰もがお念仏するので、死んだ時に申すものぐらいに思っていた。猫に小判、豚に真珠で、宝の持ち腐れであった。

地は、仏の本願である。

如来興世の本意には

本願真実ひらきてぞ

難値難見とときたま

猶靈瑞華（ゆうれいすいけ）としめしける

本願力にあいぬれば

むなしくする人ぞなき

功德の宝海みちみちて

煩惱の濁水へだてなし

弥陀の本願信ずべし

本願信するひとはみな

摂取不捨の利益にて

無上覺をばさとするなり

「真実の教をあらわさば大無量寿経これなり」と教行信証に掲げられた親鸞聖人が、大經の上下二巻は、弥陀の本願の成就と、その力で衆生が往生成仏せしめられることをとかれているので、一番大切なことは、その本願のいわれを聞信させていただく一つであると仰言る。

ことに、禪宗は見性成仏をといて見の宗教といわれ、真宗は聞其名号（もんごみょうごう）を中心とした聞の宗教と呼ばれている。しかもその聞は、沢山の經典を読んだり、種

一般に、外から来る音波を耳にしても、それを自分の持ち合わせの智慧才覚で判断してひとりぎめする域から出られない、俚言にもある通り「公園の池の茶店で、手を打つと女中さんはお茶をはこび、池の鯉は浮かび、雀はバツと逃げる」のは好例である。

思えば私の耳は真実なるものを真実のままに聞きとることの出来ない聾、耳無しである。このまま放っておかれたら決してしない無明の洞窟の中にさ迷い続けねばならなかったのに、幸に有縁のよい先生方に導かれて、この真実を真実と聞きひらくことの出来ぬ身を教えられ、その聾の私にとどけようとの本願の一念が、点滴が岩をもうがつのと同様に、私の上にそそがれていることを知らされたのである。文字通り、地獄で仏に遭うよろこびであった。本願といい念仏とあらわれて下さったのは、この愚鈍の私のためであった。

（続く）

○

世はうつり人はかわれど
変りなき一筋の道
われをみちびく

聚墨生

信謗（しんぼう）共に因となって同じく往生浄土の縁を成ず。
（親鸞聖人・常の仰せ）

仏を信する者が浄土に生まれることは誰にもよく解るが謗る者もそれが縁となるとはどういうことであろうか。ほめる者も謗る者もおへだてなく撰めて下さるところに超善惡の真実教の偉大さがあると一応は思ってみても何かもの足らないものがのこる。

そうしたある日、私自身が、仏法々と云いながら知らぬ間にそれをわが物顔にして他をへだてていることに気づき、私こそ法を謗る者と知らされ、冷汗が流れた。それまではひとごとと聞いていたが、この仰せは私の心底を見抜かれて、繰り返されたお慈悲の声となった。

思うに仏法は私共凡愚者を救い遂げて下さる教であるから、自分自身をのけては空転する。「傍観者ではないけん、当事者で聞けよ」とかって恩師から教えられたことが、再びありがたく心に浮かんできた。

（四六・一月十七日）

ただ念仏して弥陀にたすけられまいすべし。

（歎異抄・二条）

年頭に五十年近く音信不通だった郷里の友人から「君は一筋に仏道に生きてきたが、僕の生涯のよるべとなる言葉を教えてくれ」との書信を突然うけた。

瞑目一番、がむしやらにたどってきた五十年を省みたまそれは身にもつ業報のままにさんたんとした罪禍の連続であり、現在の私はいよいよ身の愚悪さが照らし出されていて、友人に送る何ものも無いことに恥じ入るばかりである。そうした中で、親鸞聖人が恩師法然から聞きとられた、「ただ念仏して弥陀にたすけられまいすべし」との実語を私も身にうけて念仏申しているという一事を書き送った。重病で胃腸の弱った者にはお粥だけが養分となるように現に悪人愚人の私には、阿弥陀仏が成就して下さったお慈悲の念仏がなくてはならぬものであり。それ一つで成仏の願いを満足させて頂いているのである。

（四六・三月 四日）

いたりて堅きは石なり、いたりて柔かなるは水なり、水よく石をうがつ云々
（蓮如上人間書）

蓮如上人の八十通の御文には、一心に弥陀に帰命せよ、称名は往生決定の上の報恩であると、一通々々にくり返し

梵声（ぼんしょう）の悟らしむること深遠なり、微妙にして十方に聞こゆ。（天親菩薩・願生偈）

北風の強い師走のさわがしい或る朝、私はある田舎の駅に走せつけた。二十人ばかりが小さなストープを囲んで列を待ちをしていた。そこへ一人の足の不自由な物、古い風の男がやって来たが、人々に遠慮して、すみのベンチに腰をおろし、ほどなく袋から尺八を押しただくようにして取り出し、静かに一曲、また一曲と奏しはじめた。私はその敬虔（けいけん）な態度にひかれて聞き入っていると、歳末のわずらわしさも消えて心が明るく転じているのに驚いた。まわりの人々の顔にも、仕草にもやわらぎが見えた。

その時、この願生偈の二句が浮かんた。弥陀のきよらかな御声が遠く十方にとどくと、人々の心が自然にやわらぎ深い悟りに転入するという不思議な德音の片鱗にふれ、私の内から念仏が自然に流れ出て、おぼえず尺八の曲に唱和していた。

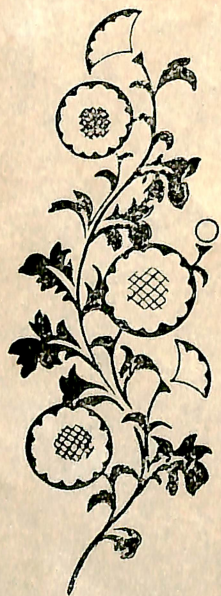
（四六・二月十四日）

まぎかえし説かれている。私は始めに、これなら一通でよさそうなのをとさえ考えた。

その後、病気を縁として雑事から解放されて、御文にじっと思いをひそめた時上人の御親切に気がついた。母が子に大切なことをくりかえして教えるが、わかってる、くどいと、子は反抗するが、親はそうせずにはいられないのである。

さらに仏の智慧に照らされて、自分の無智、無能さ、絶対なるまことに對しては石ころ同様な身と知らされるにつけ、仏心のまことの絶え間ない注ぎかけによって、点滴（てんてき）が堅い石をうがつように、教えが身につき、心をひらいて下さるより外には救いの道のないことも知れ、上人の倦むことのない慈悲が身にしみ、御文や御一代聞書をくりかえしはじめた。

（四六・四月二五日）



あ と が き



新刊書紹介

日本家庭史と教育 福島政雄著

発行所、東京都千代田区飯田橋、酒井書店。
定価、一三〇〇円。振替、東京一五九七二番。

先生は三十年前、広島文理大で教育史を講ぜられた頃から日本の家庭の特色を明らかにされたい一念にかられて日本の家庭史をしらべ始められ、その意願を持ち続け、日本家庭の優れた点を発見、その特色を解明されたものである。

先生は、ある教養ある西洋婦人が「戦争以前の日本婦人に敬服して女性の手本にしていたが、戦後の日本婦人が全く変わっているのがびっくりした」という声を耳にされて、いよいよ日本の家庭教育のよさを書きこすことの責任を感じられたといわれている。本書に日本の古代から、奈良、鎌倉、吉野、室町をへて、戦国時代に及び、さらに徳川期の儒者や心学者の家庭や、庶民の家庭の様子を誌していらる。永年持ち続けて下さった先生の御念願の成就であり、八十二歳の先生の晩年の大著で、志ある方々の御講読をおすすめ申す次第である。

○ ○
伝統を無視した革新は線香花火に終り、革新のない伝統の固執は陳腐した枯木に化する。旭日が昔ながらに東天に昇りつつ、

日々に生き生きと仰ぐ人々の心を一新する、この斬新さこそ、人々の求めてやまないのちの源泉である

御案内

○毎月第一、二、三日曜、午後一時半。一道会例会。
市電、新郊通り一丁目下車、東入ル
三筋目、左入ル。一道会館
○毎月二十四日、午前午後、昭和区小桜町、教西寺、法話会。
市電、御器所通り下車。市バス、北山下車。

定価 半年 二百五十円(送共)
一年 五百円(送共)

編集・発行人 花田 正夫
名古屋市南区駈上町二ノ八八
電話八二一局七〇三七番

印刷人 吉野 穂志郎
愛知県西加茂郡三好町大字福谷

発行所 慈光社
名古屋市南区駈上町二ノ八八

振替口座名古屋一〇四七〇番
郵便番号 四五七

謹告

「慈光」の誌、代を左のように
改正させて頂きます。

昭和四十六年七月号より

半年分 400円 (送料)

一年分 800円 (送料)

但し、^{前号に}前納ご購読の方は、この

期間には改正いたしません。

右ご諒承願います

慈光社